

医学部長寄稿

今しなければならぬこと

医学部長 菅原和夫

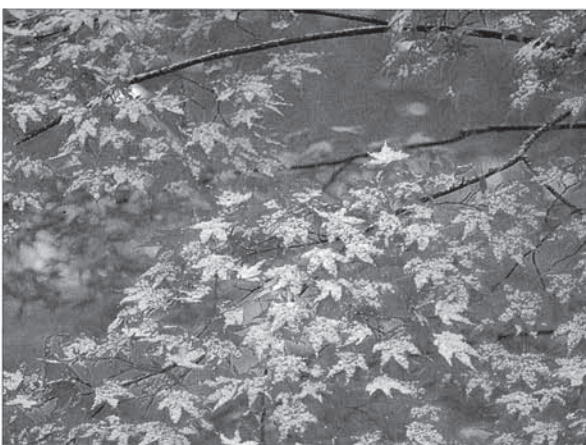


平成十六年度から、いよいよ独立行政法人化がスタートされることはほぼ確定的になってきております。しかし、その全体像は未だにはっきり示されておりません。国がはっきりとした内容を示すまで、我々は待つていくわけにはいきません。はっきりした内容が出てくるまでじっと待つていたのでは、内容がわかった時には、それに対する対応は既に手遅れの状態になりかねません。これから行われようとしている大学の独立行政法人化は、現在各大学間に求められている連携・再編・統合とは無縁ではありませぬ。当然この二つの流れはリンクしていると考え

弘前国際医学フォーラム

第六回学術集會 間もなく開催

来る十月十五日・十六日の二日間にわたり「脳研究の進歩―脳血管障害と神経変性」をテーマに弘前国際医学フォーラム第六回学術集會（実行委員長／脳血管



The 6th Meeting of the Hirosaki International Forum of Medical Science
Advances in Brain Research
— Cerebrovascular Disorders and Neurodegeneration —
Communication Center, Hirosaki University School of Medicine
Hirosaki, Japan
October 15-16, 2002

病態部門 佐藤敬教授）がこの二日間にわたり「脳研究の進歩―脳血管障害と神経変性」をテーマに弘前国際医学フォーラムの開催である。多数の御来場を期待したい。

「全国最大級の三年次編入学」等、全国的にも注目を浴びております。

去る八月十九日と二十日の二日間にわたり、平成十五年度弘前大学医学部医学科第三次編入学（学士入学）第一次選抜の書類選考をパスした二百名について、第二次選抜が行われ、無事終了しました。入学定員二十名と全国最大規模の学士入学で、応募者は六百名を越え、三十倍の倍率となりました。弘前大学医学部医学科は、将来構想として全国でも数少ないメデイカルスクールを目指してありますが、いよいよ今年からその構想に沿った最初の一步を踏み出したわけです。今年度新規に行われる最大の行事であり、全国的にも注目されていたことでもあり

ます。したがって、この試験に対する試験委員の意気込みは、相当なものがあつたように思います。

試験後受験生に無記名で、この試験に関する意見を書いてもらいました。多少の問題点の指摘もありましたが、概ね大変高い評価を頂きました。この結果は後ほど、まとめて皆さんに報告したいと考えております。

元村委員長を始め、全委員が叡智を絞って行った結果が、受験生からこの試験に対する大変高い評価を得たものと思えます。弘前大学方式として評価されるのではないかと期待しております。今後、三年次編入学の学生に対するカリキュラムの工夫と充実が、さらなる評価の対象となるでしょう。

これらをクリアしながら、我が医学科の売りとしているメデイカルスクール構想に向けてアクセルを踏もうと考えております。

しかし、これらの事に比べると教育・研究・診療の面に関しては今ひとつと思われまふ。教育面に関しては現在、須田教授を中心にコアカリキュラムの編成、中根教授を中心にチュートリアル制度の導入、奥村教授を中心としたクリニカル・クラークシップの検討など、その緒に就いたところですが、教育面での充実を急がなければなりません。

研究面につきましては、大学院制度の大幅改革が急がれます。ある程度研究分野別にまとまった再編も考えられます。この事に関しましては、現在奥村学事委員長を中心に、現在ある各専攻分野の再編成を行っているところですが、大学院の枠組みが決まってくる、それに連動し現在の学部講

医学部図書

第五回特別展示会 「よりよい医療を求めて」終了

医学部図書館で春秋の年二回特別展示会を持つようになって三年目になった。本年四月開催の平成十四年度最初の医学科図書委員会では、春は「よりよい医療を求めて展」、秋は「ジェンナ―展」を持つことが決まった。春の「よりよい医療を求めて展」は通算第五回目になる。副題として「セミナー医療と社会の歩みと機関誌・関係書籍」とあるように、「セミナー医療と社会」の創立以来の十年間の活動を紹介し展示するものである。このセミナーの代表世話人の品川信良名誉教授は勿論だが、非常勤講師として本学部の教育に参加されている方も少なくない。とはいっても学外の活動団体の展示会は最初のことであった。われわれ図書委員が大きな共感を覚えたのは、「医療」を深く考察し、「大医」を志向したその活動理念であった。このセミナーの構成は実に幅広い職種の方々から成る。それぞれの立場で、今日の・明日の医療をよりよいものにしていくと努め、年二回の発表会と機関誌を発行している。

展示内容は、初回発表会からのポスターと全号の機関誌、会員の刊行書籍、生命倫理を中心とした百点余の雑誌書籍が展示された。中国（セミナー）会員である五十嵐靖彦人文学部教授が参加）、インド、イスラエル、オーストラリア、ニュージーランドなどの生命倫理（あるいは環境倫理）雑誌もみることができた。ドイツの関係雑誌も展示された。開催期間は六月二十四日から七月十九日の一ヶ月、土日休館なので正味二十日間である。入館者は三百五十名、一日二十名弱であった。当初からの市民公開の原則を今回も踏襲した。市民参観数増は毎回の反省点である。学生の参観が多かったことはうれしい限りであった。

図書館からは、今裕訳「ヒポクラテス全集」と医学図書館協議会作製のヒポクラテスのメダルを添えた。第四代北大総長の今裕先生は、この弘前大学医学部が建つ場所にあった朝

はまず学部内で、「総論賛成、各論反対」というような近視眼的な視野を捨て、大局を見据えた自己改革を押し進め、新しい組織へと変わらなければならぬと思っております。

時間は多くありません。今考え、実行しなければ間に合いません。全員で力を合わせて力強く進もうではありませんか。

鳴小学校のご出身である。今回の展示会も多くの皆様のご協力を頂戴した。附属病院入口左手にあるコス島由来の種子からのヒポクラテスの木と弘前大学医学部同窓会の鵬桜会とともに建立した石碑を配した今回のポスターは医療情報部船水亮平氏による。青森医学振興会のご支援もいただいた。最後に、身内のことで如何かとも思うが、図書館員に感謝したい。ヒポクラテスの木のプラタナスを挿し、この展示会に潤いを与えてくれた心遣いにも、ありがとう。（図書・工藤）



新任教授紹介

生化学第一講座

教授に就任して

生化学第一講座 高垣啓一



平成十四年八月一日付で、遠藤正彦教授の後任として弘前大学医学部医学科生化学第一講座を担当させていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は、昭和五十五年弘前大学大学院理学研究科を修了後、東北大学非水溶液化学研究所を経て、遠藤正彦先生（現弘前大学長）の指導のもと、プロテオグリカンという糖タンパク質の研究を行ってきました。プロテオグリカンは動物細胞の細胞外マトリックス成分の一つであり、その物質レベルでの研究は、日本が伝統的に先導的立場を堅持してきた分野であります。そのような背景のもと、生化学第一講座では遺伝子組み換えと同様に、プロテオグリカンの糖鎖を酵素的に組み換え、新しい機能を持つ人工プロテオグリカンの合成に関する研究が、独自に萌芽し、進められ、そして発展してきました。私は本講座独自のこの研究スタイルを継承し、さらに新たな発展に結びつけられるように研究を進めたいと思っております。具体的には以下のことを考えております。

- 1) リコンビナントプロテオグリカン糖鎖の組み換えと修復
遺伝子工学的に合成された糖鎖欠損プロテオグリカンへの糖鎖の回復を行い、遺伝子による研究と物質レベルによる研究との間を埋めたいと思ひます。
- 2) 細胞を制御する糖鎖情報の解説
糖鎖には細胞の増殖や分化を制御する情報が存在します。そこで、私が合成したオリゴ糖ライブラリーを利用し、糖鎖構造に刻まれた細胞制御に関する情報（糖鎖言語）を解説してみたいと考えております。
- 3) 糖鎖工学の応用的展開
上述した糖鎖工学的研究の応用として、腫瘍化と転移、組織損傷と修復など、糖鎖医学への発展を図りたいと思ひます。

教育に関しては、学生個人に対応できるオーダーメイド教育を目標に種々模索したいと考えております。また、密接に関連する生化学、薬理学、病理学、その他の基礎医学の基盤となり得る教育、更には臨床への橋渡しできる教育を行いたいと思ひます。大学院教育は、科学研究のおもしろさを伝えることを目指したいと思ひます。そのために最も重要なことは、自らあるべき科学者としての範を示すことと思ひます。今、弘前大学は、独立行政法人化、再編、統合問題

教育研究基盤校費の傾斜配分の基礎となる 教育、研究、管理・運営の評価方法

医学部・附属病院 自己評価委員会 生化学第二講座 土田成紀

医学部・附属病院自己評価委員会は二年ごとに教育、研究、診療、管理・運営の自己点検・評価の結果を報告書の形で刊行し、今年度中に二〇〇〇年度と二〇〇一年度の分を発行する予定です。数年前から、教育、研究、管理・運営の活動状況は、それぞれの講座・部門に配分される教育研究基盤校費の金額に反映されることになり、多くの教官の関心を集めています。特に、今年度から教育の評価方法がそれまでの授業時間数から、時間数と学生の授業評価の結果を加えたものに変更になり、また、研究の評価も単年度で行うことになりました。教育研究基盤校費の配分などの予算案は医学部予算委員会が審議されますが、自己評価委員会は教育、研究、管理・運営の評価方法をとりまとめる役割を担っています。講座・部門に配分される総額の三〇％が評価結果により傾斜配分されます。すなわち、その結果により配分が多くなったり、少なくなったりします。教育、研究、管理・運営の割合は四対四対二です。教育、研究などの評価は大学の根幹に係わる重要な問題です。現行の評価方法が多岐にわたることを考えていることも否定できませんが、その方法を紹介し、この問題を考えるきっかけにしたいと思ひます。

別表1. 講義の評価式

$\Sigma(\text{講義コマ数} \times \text{職種係数}) + \text{共通教育基礎教育科目} + \Sigma(\text{各教官の講義に対する学生の評価} \times \text{各教官の講義コマ数} / \text{評価を受けた教官の全講義コマ数})$

(45点) (5点) (10点×5=50点)

↓ ↓ ↓

(講義コマ数×職種係数)の総和の値により下の表に従い10~45点を与える

分担していれば5点を与える

学生の評価アンケートの(A(1)-(6)の平均値+Bの値)×5

総和の値	職種係数
40<	45点
30< ≤40	35点
20< ≤30	25点
10< ≤20	15点
≤10	10点

講義コマ数として数える科目

- 専門基礎科目
- 専門科目

講義は専門科目、専門基礎科目（医学概論、医学英語）と共通教育基礎教育科目（統計学、基礎物理学、基礎化学、基礎生物学、基礎科学実験）を、実習は専門科目の実習、SGTと研究室研修を対象とします。

講義の評価項目は、一、講義コマ数、二、職種係数（教授一・〇、助教授・講師〇・八）、三、共通教育基礎教育科目の分担、四、学生の評価の四項目で、一と二で四十五点、三が五点、四が五〇点の合計一〇〇点で各講座、部門の評点を算出します。

実習の評価項目は、一、実習コマ数、二、研究室研修、三、学生の評価の三項目で、一が二〇点、二が一〇点、三が七〇点の合計一〇〇点で各講座の評点を算出します。

別表2. 実習の評価式

実習コマ数 (20点) + 研究室研修 (10点) + 学生の評価 (10点×7=70点)

↓ ↓ ↓

基礎講座実習コマ数	臨床講座SGTコマ数
45<	700<
25 ≤ < 45	500 ≤ < 700
< 25	< 500

3名以上 10点
1~2名 5点
0名 0点

学生の評価アンケートの(A(1)-(5)の平均値+Bの値)×5

講義コマ数として数える科目

- 専門科目の実習
- SGT

講義と実習の点数はその数値により、別表1と2に従い、五段階あるいは三段階に分けて点数化します。講義についての学生の評価は学生の評価アンケートのA項目(1)~(6)の平均値とB項目の数値を加算したものを(一〇点満点)を七倍して、七〇点とします。実習の評価は、講義全体としてアンケートを行っているので担当教官ごとの集計はありません。

別表3. 研究の評価式

1 論文 (N1)	A, Bの原著、総説、著書 主発表機関として発表した英文論文のインパクトファクター値の総和 副発表機関として発表した英文論文のインパクトファクター値の総和 英文論文の総数 (インパクトファクターのないものも含めた合計) 和文論文の総数 $N1 = IFA + 1/2 IFB + k1 \times 0.2 + k2 \times 0.1$	IFA IFB k1 k2
2 研究費 (N2)	科研費の件数 その他の省庁からの研究費の件数 公的研究助成の件数 民間の研究助成の件数 $N2 = n1 \times 1 + n2 \times 1 + n3 \times 0.5 + n4 \times 0.2$	n1 n2 n3 n4
3 学術賞 (N3)	国際レベルの学術賞の件数 全国レベルの学術賞の件数 地方レベルの学術賞の件数 学内レベルの学術賞の件数 $N3 = m1 \times 1 + m2 \times 0.5 + m3 \times 0.3 + m4 \times 0.2$	m1 m2 m3 m4
4 学会 (一般演説を除いた特別講演、シンポジウム、ワークショップ、パネル等) (N4)	国際レベルの学会での回数 全国レベルの学会での回数 $N4 = o1 \times 1 + o2 \times 0.5$	o1 o2

研究の合計点 = (N1 × 1 + N2 × 0.3 + N3 × 0.2 + N4 × 0.2)
研究の評価点 = (合計点 / 教官数) × 100

講義と実習の評定の合計点により基礎講座・部門の間と臨床講座の間で、それぞれA、B、Cの三段階に分けます。

二、研究の評価方法
評価の対象は一論文、二研究費、三学術賞、四学会発表の四項目です。それぞれの項目は別表3の評価式に従い数値化され、研究の合計点を求め、これを教官数で割り、一〇〇を掛けて評価点とします。

論文は、原著、総説、著書を対象とし、各講座・部門が主たる発表機関である場合をA、副発表機関である場合をBとに分け、各論文のインパクトファクターをAの場合はそのままの値を、Bの場合はその二分の一の値を加算します。英文論文数と和文論文数は係数をそれぞれ〇・二と〇・一をかけて、インパクトファクターの総和に加算します(N1)。その他の項目は別表3の通りです。研究の評価は評価点の順番に基礎と臨床講座を含めてA、B、Cの三段階に分けて行います。

三、管理・運営の評価方法
評価の対象は一教官数、二大学院学生数、三研究生数、の三項目です。

教官数は各講座・部門の対象年度の四月一日現在の現員で数え、教授が三点、助教授・講師二点、助手一点とし、役職者として学部長、評議員(二名)、学務主任、入試委員長の五名は三点が加算されます。学部全体のそれぞれの人数に点数をかけた値の総和を分母とし、各講座・部門の人数と点数をかけた値の和を分子として評価します。

大学院学生数は、在籍大学院学生の総数を分母とし、各講座・部門の大学院学生数を分子として評価します。研究生数は大学院学生数の場合と同様に評価します。

管理・運営全体としての評価は、一、二、三の項目に対し、それぞれ七対二対一の重みづけをして、その和を各講座・部門の値として評価します。

平成14年度青森医学振興会総会終了 —事業計画書・収支予算書了承される—

平成十三年四月二日付けをもって発足した社団法人青森医学振興会の平成十四年度理事会及び総会が、平成十四年六月一日日医学部コミュニケーションセンターにおいて開催された。平成十三年度収支決算については、地域医療振興事業の助成、医学の教育・研究助成、国際交流の助成などの事業費や管理費などについて二千二百万円余の決算が承認された。次いで、平成十四年度の事業計画書、収支予算案が理事会で決定され、総会にて議決された。

木明知教授所蔵の稀脚本及びジェンナー自筆論文等の展示並びに講演会を行う。

○弘前大学医学部学術賞受賞研究のオープン展示（弘前大学医学部若手研究者及び各講座部門の研究について、学部学生を対象にわかりやすく展示する。）

三) 地域医療調査、住民健診

① 県下医療過疎地域保健活動（弘前大学短命県返上プロジェクトチーム及び保健医学研究会が実施している県下医療過疎地域における地域保健活動に医師を派遣し、支援する。）

四) 地域医師確保

① 地域医療機関医師派遣・自治体病院問題懇談会等

② 青森県医師確保事業（弘前大学医学部卒業者の県内定着の推進及び県外卒業者のUターン事業の推進。弘前大学医学部在学生の卒業後本県定着の推進。）

○ 卒後臨床研修指導医の医学教育ワークショップ

五) その他（地域医療向上）

（青森県の地域医療の向上に関することを支援する。）

④ 医学英語教育用CD購入

（医学英語、特に英語による患者インタビュー教育の充実を支援する）

二) 医学研究

① 県内医療機関の医学研究

○ 青森県内若手医師、グループが行う医学研究に対する助成（県補助率1/2）

○ 医学部学術賞に対する助成（三十万円×二名、十万円×二名）

○ メディカルインテグリティセンター（MEC）助成

○ 先進的研究推進のための助成（COEを目指す先進的研究を育成、推進する。）

三) 国際交流の助成

① 国際学術集會開催支援（青森県内における医学・医療に関する国際交流集會を支援する。）

○ 弘前国際医学フォーラム第六回学術集會（附属脳神経血管病態研究施設及び脳神経外科科学講座が中心となって、「脳研究の進歩—脳血管障害と神経変性」をテーマとして、十月に開催する。）

② その他（国際交流支援）

（青森県における医学・医療国際交流に関することを支援する。）

○ 医学科学生と教官の海外派遣

（テネシー大学メンフィス校研修生派遣、三沢空軍病院研修生派遣、ロシア国立極東総合医科大学研修生派遣及び受け入れ、国際化教育奨励賞、夏季研修生壮行会）

平成十四年度文部科学省・学術振興会科学研究費補助金の採択ならびに交付が行われました。弘前大学医学部・附属病院における結果の詳細は表一の如くで、交付決定採択件数九十六件、直接経費の総額は一億八千六百三十万円でした。一昨

IV、広報活動

① 社団法人青森医学振興会PR冊子作製

② 医学部ウォーカー発行のための備品購入、座談会等の経費

③ 弘前大学医学部医学科・附属病院紹介冊子

なお、この度役員変更の申し出があり、白洲勇理事長が高齢のため退かれ新理事長には前弘前大学長吉田豊先生が、金上幸夫副理事長の代わりに佐々木義樹青森県医師会会長が新副理事長に就任、また理事は、遠藤正彦弘前大学長、泉井亮前学務主任に代わり菅原和夫医学部長、鈴木重晴学務主任が新理事となった。前理事であった鈴木重晴先生の理事就任に伴い、後任の監事には薬理学講座元村成教授が指名された。

役員改選に伴う青森医学振興会の平成十四年度の役員構成が決定され、上述の事業計画の推進がスタートすることとなった。

（文責／第一内科 棟方昭博）

平成十四年度科学研究費補助金交付
医学部に
総額一・八六億円

表一. 医学部・附属病院科学研究費補助金内訳

研究種目	件数	交付決定額(千円)	
		直接経費	間接経費
基盤研究 A	2	13,600	4,440
＃ B	14	63,500	
＃ C	36	52,935	
特定領域研究	1	2,000	
地域連携	1	6,300	
地萌若手	21	24,900	
若手	0	0	
若手	21	23,100	
合計	96	186,335	4,440

表二. 部局別内訳

部局等名	教官数	申請件数	採択件数	申請率	採択率
医学部(病院含)	316	365(326)	95(89)	115.5	26.0(27.3)
理工学部	99	82(82)	24(21)	82.8	29.3(25.6)
農業生命科学部	75	55(60)	24(19)	73.3	43.6(31.7)
教育学部	100	31(37)	5(10)	31.0	16.1(27.0)
人文学部	93	29(44)	9(9)	31.2	31.0(20.5)
学内教育研究施設等	8	5(5)	2(2)	62.5	40.0(40.0)
合計	691	567(554)	159(150)	82.1	28.0(27.1)

() 内は平成13年度

表三. 東北地区国立大学との比較

大学名	採択件数	配分額(千円)
弘前大学	159(150)	313,850(272,290)
岩手大学	113(114)	289,120(226,590)
東北大学	1,571(1,541)	6,905,290(5,882,780)
宮城教育大学	21(18)	45,600(249,210)
秋田大学	148(145)	298,030(249,210)
山形大学	204(209)	436,050(416,410)
福島大学	42(44)	42,600(47,600)

() 内は平成13年度

年度の配分額が二億五千万円であったのに対して、昨年の総額が一億四千九百五十万円と落ち込んでいたが、本年度は厳しい現状の中幾分持ち直した結果となりました。これは遠藤前医学部長の胆入りで申請の件数が増えたことによると思われるが、採択率は昨年同様上がっており、申請内容のレベルアップが必要という昨年の宿題が残りました。

—講演会のお知らせ—

左記の公開講演会を開催いたします。聴講をお誘い致します。

日時 十一月八日(金)午後一時半～二時半

場所 弘前大学医学部基礎講堂

演題 「ジェンナーの贈りもの—予防は治療に優る—」

演者 加藤四郎先生

(大阪大学名誉教授・元大阪大学微生物研究所所長)

主催 弘前大学医学部図書館 弘前大学医師会

尚、医学部図書館で第六回特別展示会「ジェンナー展」を開催中です。(十月二十一日～十一月二十九日)こちらのご参観もお待ちしております。

表二からも読み取れますように医学部・附属病院はこれからの学内の牽引役としての重責も課せられております。今回は他大学医学部、医科大学との比較は行い得ませんでした。参考として東北地方国立大学の採択、配分額を表三に示しました。

東北大学とは規模の面で比較は無理としてもせめて、山形大学には追いつき、追い越したい所です。

次年度の応募も間もなく行われます。諸先生の更なる御努力に期待します。

(花田 勝美記)

研究室紹介

脳神経血管病態研究施設

分子病態部門

講師 森 文秋

当部門では二〇〇〇年二月に若林孝一が教授に着任し、この二年余は研究室の

セットアップに明け暮れた日々でしたが、そのような中、脳研各部門ならびに医学部の複数の講座から温かい支援を受けました。助手の丹治は脳血管病態部門において細胞培養・分子生物学の技術を習得し、現在は

同部門と共同で病態解析を行なっています。講師の森は北海道大学および本学解剖学講座で習得した「*stim hybridization*」や免疫電顕の手法を用い病態解析を基盤とした研究を継続していま

す。若林は本学病理学講座、法医学講座や県内基幹病院の協力を得て、脳神経疾患の病理検査を開始しました。脳研内に加え、精神科、老年科などとの共同研究もスタートしました。今後さらに学内外との共同研究を進展させるとともに、神経病理学を基盤とする教室づくりを進めてゆく所存です。

現在の研究テーマとしては、パーキンソン病および痴呆脳における封入体形成メカニズム、グリア細胞の機能と各種病態にお

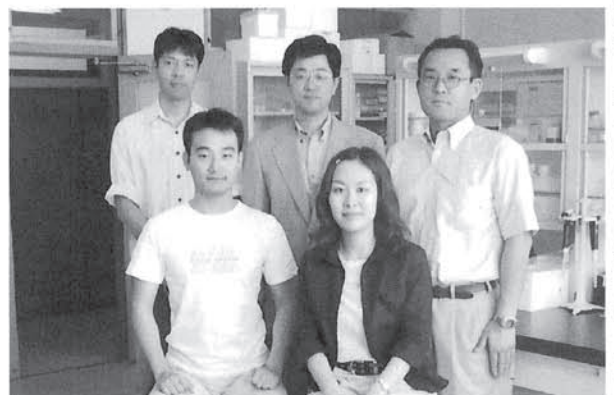


写真2. 分子病態部門のメンバー

ける変化、種々のモデル動物を用いた病態解析、脳腫瘍の病理診断などが挙げられます(写真1)。なお、業績に関しては教室のホームページ、<http://hippo.med.hirosaki-u.ac.jp/neurop/>をご覧ください。

さて、当部門には七つの信条があります。それを挙げることで研究室の雰囲気

がわかっていただけたと思います。ほとんどは若林教授が日頃口にしている言葉から生まれたものです。

一、「学生を大切にせよ」
例えば、研究室研修では三人の教官が自身の体験(失敗談)も含め学生に指導しています。若い時ほど、より多くの可能性を秘めています。それを引き出してやるのが我々の仕事のひとつと考えています。まず、顔を合わせて話してみること。今の「成績」よりも将来の「希望(野心)」が重要です。写真2は本年度の研究室研修の時に撮ったもので、学

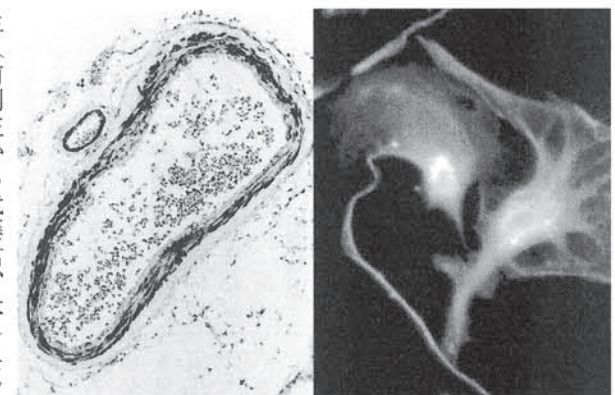


写真1. 脳血管(左)とグリア細胞(右)におけるシヌクレインの発現

せよ」
昨年学位を取得した丹治助手が、平成十五年一月から三年間、アメリカのテキサス大学に留学の予定です。今後の活躍が期待されます。

六、「学問研究の扉は常にオープンであれ」
当部門の研究室、図書室、実験室の扉は常に開かれ、誰でも自由に出入りできるようになっています。この

モットーに惹かれて、昼休みに「生協の食堂は混雑して嫌だ」という学生が時折食事を訪れます。七、「人生は楽しく、幸せは長く」
人生は一度。やりたいことをやるべき。「好きこそものの上手なれ」です。また、自分が幸せでなければ他人の心配はできないものでしょう。

結局のところ、研究ならびに教育については真剣に、それ以外は和気あいあいとやっているとというのが現状です。ご質問やご相談などございましたら、どうぞお気軽に足をお運び下さい。

今年度の学部長杯争奪ソフトボール大会で脳研チームが三位になったことも特筆される。そんな中でわれわれ脳血管病態部門は他の三部門に支えられて一むしる積極的に支えられることを求めて一施設全体の充実の恩恵を受けている。

論文を書いている間は論文のことだけを考えた他のことには目もくれず、食事中にはごはんをこぼしても気付かず、就寝中も夢の中で論文の文章が浮かんでくるようであればいけません。寝言が英語で出れば一流です。しかし、これがかなり難しい。

三、「小さな分野でも世界のトップとなれ」
これは文字どおりで、目標は高く。有名なことわざに「鶏口となるも牛後となるなかれ」、「Better be the head of a dog than the tail of a lion」があります。

四、「仲間を作れ」
学内外の種々の研究機関との共同研究を積極的に進めることに加え、学会でのコミュニケーション(飲み会)を大切にしています。五、「かわいい子には旅をさ

せよ」
昭和五十年に脳研メンバーの一人に加えて頂いてから四半世紀を過ぎた今、脳研は少なくとも私の知って

よりリハビリテーション部門から機能回復部門と名称が変更され、平成十二年から佐藤が福田名誉教授の後塵を拝している。

現在の研究テーマとしては、脳血管障害やパーキンソン病に伴う骨代謝障害、血液凝固能からみたパーキンソン病に伴う悪性症候群の病態生理、ビタミンD欠乏性 myopathy からみた脳血管障害に伴う大腿骨頸部骨折の機能的予後、脳血管障害再発危険因子としての血漿ホモシスチンの意義、脳血管障害における matrix Gla 蛋白の遺伝子多型などにつ

脳血管病態部門

教授 佐藤 敬

昭和五十年に脳研メンバーの一人に加えて頂いてから四半世紀を過ぎた今、脳研は少なくとも私の知って

機能回復部門

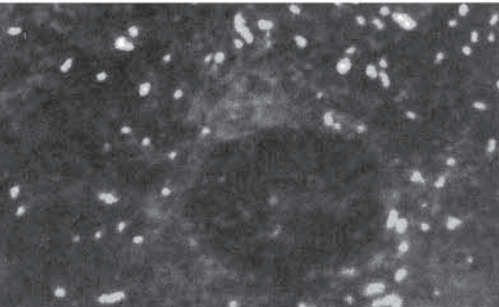
教授 佐藤 能啓

当部門は昭和五十三年度福田道隆名誉教授がリハビリテーション部門として創設され、これまで多数のリハビリテーション専門医が誕生し、現在大学では付属病院リハビリテーション部の近藤助教、青森県立中央病院リハビリテーション科松本部長らが活躍中であります。三年前の脳研の改組に

現在、大学院生の細川がこの三月脳性麻痺の臨床的研究で学位を取得して大学院を卒業、研究生の安田が身体障害者の caregiver 文として学会誌に出版し、

果てぬ夢みたいなものではあっても、事実そうあるうとあがいている。そして研究室のキャッチフレーズは「ほわほわががが」で、「ほわほわ」とした雰囲気の中から「ががが」研究成果を発表することを目指している。「ががが」への道はまだ遠いが、「ほわほわ」の方はかなり達成できていると自負しており、これを失うことなく「ががが」への道を邁進して行きたいと思っています。

現在学位申請中であり、こうした若い人々の今後の活躍に期待したい。



脳血管内皮細胞のP-セレクトリン免疫蛍光染色

今年度の学部長杯争奪ソフトボール大会で脳研チームが三位になったことも特筆される。そんな中でわれわれ脳血管病態部門は他の三部門に支えられて一むしる積極的に支えられることを求めて一施設全体の充実の恩恵を受けている。

現在、主に脳血管障害害を意識した研究を実施しており、血管内皮細胞・平滑筋細胞に関する研究、グリア細胞に関する研究が主なもの

で、いずれも培養細胞を道具に実験を行っている。しかしこれらにとらわれることなく、特に大学院生の研究テーマはマクロファージや気管上皮細胞など、さまざまな範囲にわたって自然に共同研究が進んでいる。例えば、二〇〇一年度の脳血管病態部門の英文原著十四編中、十編は脳研内の共同研究によるものである。研究面以外でも、

いる限りにおいて最も充実している。神経変性疾患を研究の中心に置く神経統御部門、神経病理が専門の分子病態部門、脳卒中後遺症の病態生理を研究する機能回復部門、細胞生物学的研究を中心とする脳血管病態部門がそれぞれの力を合わせて自然に共同研究が進んでいる。例えば、二〇〇一年度の脳血管病態部門の英文原著十四編中、十編は脳研内の共同研究によるものである。研究面以外でも、

今年度の学部長杯争奪ソフトボール大会で脳研チームが三位になったことも特筆される。そんな中でわれわれ脳血管病態部門は他の三部門に支えられて一むしる積極的に支えられることを求めて一施設全体の充実の恩恵を受けている。

現在、主に脳血管障害害を意識した研究を実施しており、血管内皮細胞・平滑筋細胞に関する研究、グリア細胞に関する研究が主なもの

で、いずれも培養細胞を道具に実験を行っている。しかしこれらにとらわれることなく、特に大学院生の研究テーマはマクロファージや気管上皮細胞など、さまざまな範囲にわたって自然に共同研究が進んでいる。例えば、二〇〇一年度の脳血管病態部門の英文原著十四編中、十編は脳研内の共同研究によるものである。研究面以外でも、



脳血管病態部門メンバー

神経統御部門

教授 松永 宗雄

神経統御部門は教官一名、ラボランチン一名と大学院生四名のみが正式メンバーのミニチュアな部門である。ただし研究面では、この他に第三内科の神経グループの教官、医員(大半が当部門OB)、さらにOBの非常勤講師が加わって活動している。当初、臨床研究部門である神経内科として発足し、昭和六十三年の改組により臨床神経部門として基礎的、臨床的両面の研究に携わってきた経緯から、現施設において神経統御部門

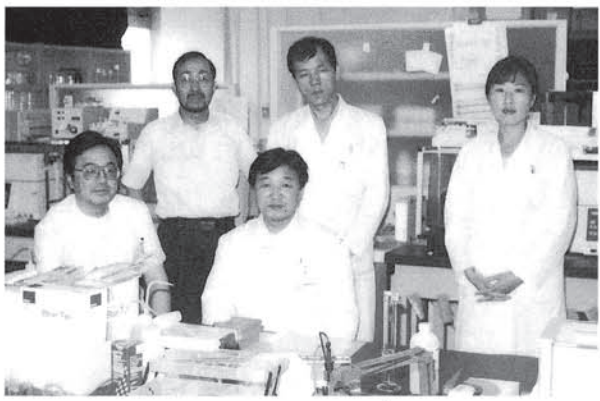
(次ページへ続く)

(前ページより)
 という名称に変更されたことに伴い基礎研究に重点を置きつつも、臨床にフィードバックできるテーマが主軸となっている。同時に学部学生の臨床神経学の講義や臨床実習、第三内科の神経専門外来や入院例の臨床、神経内科専門医の養成などにも深くかかわってきた。



北奥神経内科懇話会での当部門、秋田脳研などの顔触れ
 (十和田湖畔アズベールにて、平成十四年六月)

現在の主たる研究は、パーキンソン病脳内のドーパミン代謝やセロトニンの関与、神経伝達物質受容体の変化などいわゆる神経難病の病因・病態・治療開発に関する神経薬理学的研究、脳磁図による体性感覚の大脳皮質野の情報処理機構や聴覚視覚、体性感覚刺激の認知過程における脳可塑性に関する神経生理学的研究である。加えて、神経難病の臨床研究やワールドワークを県内外の関連病院の神経内科のメンバーと共同で行



実験室でのスナップ

がっている。国際学会にも積極的に参加することを心がけており、大学院生のタイトルは必ず海外で発表することとしている。二年前には当部門から出された学位論文が日本臨床神経生理学会賞を受賞した。医局は実験や診療活動から戻ってきたので、良い雰囲気を持している。また、

た、当然のことながら各自の仕事の意志疎通や研究・臨床両面で生じた問題の相談の場、いわば基地でもある。毎週の抄読会には固定のメンバーに加え、神経グループに配属になった初期研修医やSGT学生、さらに自主的に参加したい学生なども出入りし、オープンな体制で行われている。また、研究室研修の希望者も多く、さらに基礎人体科学で回ってくるフレッシュな学生も含め何となく環境に活気がでてきている。しかし、教官定員の少ないハン

ことが悩みである。当部門だけでなく脳研全体の近未来構想は、二十一世紀のメインテーマといわれる脳研究の推進の中核となることを目指して、当学部のメデイカルスクール構想の一環であるリサーチセンターの立ち上げに積極的に参画することにある。卒業後臨床研修の必修化と大学院制度の在り方を巡って、また国立大学の特殊法人化に際して、必ずしも明確な具体策を描ききっていない現在、ボルテージを上げていければと考えている。

いるが、日時にあわせては上十三医師会と相談の上決定したいとの挨拶があった(後日、平成十五年六月十四日に決定との連絡)。次々期(平成十六年度)開催地については、菅原会長から南黒地区が提案され承認された。これを受けて、工藤隆士南黒医師会長から挨拶があり、黒石市に



佐々木教授による特別講演

え国立大学の存亡の危機が懸念されているが地域に根ざした学会としての活性化が必要であると思われ、この挨拶があった。評議員会は菅原会長の進行により審議に入り、平成十三年度事業報告及び決算報告が新川庶務幹事および土田会計幹事よりなされた。主な議事として第八十五回総会は五所川原市に於て開催されたこと、昨年に比べ会員数が約百名程減少していること、今後会員増加策を講じる必要があることなどが報告された。収支報告については山上監事から監査報告書が読み上げられ了承された。次に、

平成十四年度事業計画案ならびに予算案について、両幹事から説明され、各々の議案は異議なく承認された。最後に、次期(平成十五年)総会の開催について諮られ、三沢市立病院院長として佐藤春夫副院長から、来年度の総会については三沢市公会堂を予定しているが、日時にあわせては上十三

挨拶の後、別会場に於て懇親会が開催され、青森市医師会会員と大学評議員の和やかな情報交換の場となり全ての日程を終了した。(木村 記)

平成14年度

弘前医学会評議員会 第八十六回弘前医学会総会

青森市で開催



菅原会長による評議員会冒頭での挨拶

において開催予定であると述べられた。また、役員交代について菅原会長から任期満了役員と新任役員、新任評議員が読み上げられ承認された。以上をもって、平成十四年度弘前医学会評議員会は全ての議案について承認され閉会した。

一旦、休憩の後、総会が同会場で開催された。二会場に分かれた一般講演は十演題の発表があった。一般講演に引き続き、外科学第二講座の佐々木教授により「肝臓癌に対する治療の現況」と題する特別講演が行われた。最近のトピックスを盛り込みながら癌治療の現況に関する豊富な内容の講演であった。会長による閉会挨拶の後、別会場に於て懇親会が開催され、青森市医師会会員と大学評議員の和やかな情報交換の場となり全ての日程を終了した。

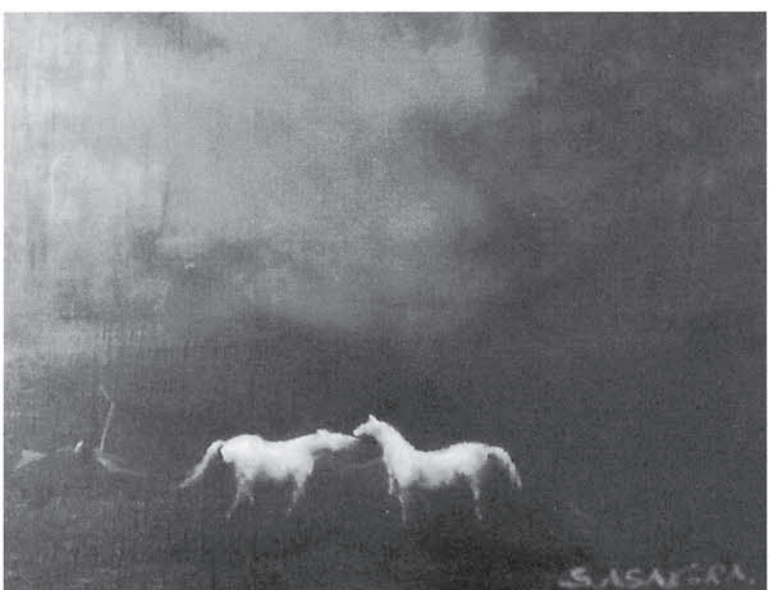
図書館絵画案内 (十四)

「牧閉ず」

朝倉 滋

先日、哲学専攻の先生と話す機会があった。医を職とした方に絵画をはじめ抜きん出て趣味豊かな方が多いのは何故だろう、とのこと。日頃、事務部職員に興味に感嘆すること少なからずの想いを懐いていたこともあって、必ずしも同感ではなかった。が、朝倉先生を思ったことだった。前回の「桜散る」に続いて、今回も図書館所蔵の朝倉作品だ。図書館には、まだまだこの欄で未案内の朝倉作品があることをお伝えしておこう。

「牧閉ず」は、これまでの奥入瀬渓流をはじめとした風景画作品とは一寸違う。一寸というのは、描かれているのは全然違う対象なのだが、なんと言ったらよいのか、描く人の心の軸・腰の据わり、心象は実に共通している、と感じるからだ。遅い夕暮れ、でも、まだ夜ではない。そんな時刻の牧場の入口、二頭の白い馬、周囲は濃淡さまざまの広い緑。想いの中から懐かしい何か浮かんでくる。少年の頃、どこかでのような想いをもったような気がする。まだ、それがはっきりした姿にはなっていない。そんな四号油彩だ。図書館二階の朝倉コーナーにある。(図・中藤)



初めての「研究室研修」発表会

平成十四年度「研究室研修」発表会 担当 元村 成

弘前大学医学部では過去五年に亘り「研究室研修」が四年次前期に週三日午後を使って、全国の医学部の状況からはかなり遅れてそれも変則的時間割で実施されてきた。毎年アンケートを取るには取りますが、その意見が取り上げられて改善されることもなく、臨床教室を巻き込んで続いてきた。一番の問題点は、各教室にそれらも助手・大学院生に預けっぱなしで、基礎・臨床間、基礎同士、臨床同士でも、学生への対応に余

りにも大きな差があったことである。特に、臨床各科は通常の教育・診療の合間の研究に、訳の解らない学生が来ることに不満が大きいだけその差が大きかった。学生への対応が日常の診療が終ってから始まることに（臨床医にとっては研究を始めるのがそうだから当たり前の）多数の学生が不満を書いていた。基礎でも全然かまってもうえなかつた、質問できる雰囲気ではなかった、などの意見も出されていた。もちろん、

毎年、甘ったれで少しきつくなると直ぐにひとのせいにして自分で解決しない（できない）多くの学生を抱えて対応に苦慮している教室も多い中、多数の教室が積極的に学生に対応し、弘前医学会や各学会等での発表を実施し成果を上げていたけれども、学生の不満意見をただの我侷と置いて放置できるものではなく、かつ各教室の助手・大学院生に

月、基礎系教室（脳研を含む）、特に生理・薬理系の助教クラスが世話人になって開始し、細菌・生化学をも巻き込んで発展した「基礎合同ゼミ」が安定してきた機会を捉えて、研究室研究の途中ではあったが、「基礎合同ゼミ」に参加している教室で研修している学生の発表会を企画した。途中からということだが、強制的に希望としたが、殆どの学生がパワーポイントを使って、あるいはスライドを使って発表し、ディスカ

●医学部(医学科)公開講座 「健康・医療講演会」が始まる

推進委員長 花田 勝美

平成九年度から、市民に開かれた医学部をキャッチフレーズに企画された医学部公開講座は本年で五回目を迎えるに至りました。この間、学内の先生方を講師

「健康・医療講演会」従来の総合テーマは老化や生活習慣病、癌など主に成人を対象にした講演であったことから、本年度はテーマを一転させ、「子供の健康と成長」に絞りました。③は県内の病院との共同開催となるため各施設の希望によりテーマが決定されます。本年は、八戸市民病院、三沢市立病院、黒石

のであることを付記し、謝意を表します。



「子供の健康と成長」推進委員会 花田 勝美

- ①医学部(医学科)公開講座「健康・医療講演会」
②同講座関連「健康・医療講演会」
③県内医療施設における弘前大学医学部

に迎え、最先端のしかも内容の濃い講義が一般市民向けに行われ、好評を博してきました。本年も別表のごとくの計画で進行していきます。この間、学内の担当の先生方には講義とともにテキストや要旨集の作成にご協力いただきました。医学部公開講座推進委員会では前任の木村博人委員長の路線を踏襲し、以下の三つの公開講座を企画致しました。

弘前大学医学部公開講座及び同講座関連「健康・医療講演会」総合テーマ「子供の健康と成長」

Table with 5 columns: 回数 (Number), 月日 (Date), 講義題目 (Topic), 講師 (Lecturer), 所属・職名 (Affiliation/Title). It lists 4 main lectures and 3 related ones.

ツションをした。その様子については「医学部ウオーカー」第十九号に、発表会仕掛人の一人で医学部ウォーカー編集委員長だった蔵田教授による記事が掲載されている。その最後に「将来の医学研究者の育成を目指すという観点からも、このような機会を設けて教官・学生両方のモチベーションを高めることができます。必要であれば」と結ばれた。さて、平成十四年度に殊もあらうに筆者に「研究室研修」担当が廻ってきた。カリキュラム変更を控えている教室で研修している学生の発表会を企画した。途中からということだが、強制的に希望としたが、殆どの学生がパワーポイントを使って、あるいはスライドを使って発表し、ディスカ

期に医学部四年生にもなったのにこれまで全くと言っていいほど臨床に触れていない。研究室研修は研究が主であるのに（従って、殆どの大学では基礎配属として臨床への憧れが強烈であった。募集人数を増加してもらって潜り込んだ学生も多々あった。それでも基礎、臨床と何とか散らばった。この時から四ヶ月後に発表会をすることを前提としていた。成果発表会である。学問的新しい知見の発表会ではない（今のシステムで、たった四ヶ月で学生オリジナルの成果が得るはずがない）、学生がその配属先の教室でどういう研修をしたのかを知るのが楽しみであった。七月第二、三週の日曜、パワーポイントによる発表会に、ポスター発表まで加わった。ポスター発表は私の意図することとは違ったが、是非にとの要望があり取り入れた。時間が短くなってしま、会場も狭かったが、発表の質は高く、他の学生からの評価も高かった。対面で質問し易い。当たり前のことで、仲間内の討論ならそれでよい。発表会の目的の一つは、大人数の前で口頭発表することである。人前で話し議論する緊張感を体験しないで何時するのだろう。日本でやたらと多い学会でのポスター発表（人前で恥を掻きたくない）、海外の学会でのポスター貼り逃げ、口頭発表で原稿丸読み、といった悪弊の芽を感じる。加えて、いざれの発表にも二百字以内の発表要旨をAbstractを筆者のアドレスに送ってもらったのだが、発表会直前の一週間サンフランシスコでの国際薬理学会に出席して

これらの学生は安心だ。そして、このような学生は自分のやった研究室研修を他と比較し、一喜一憂している様子が見え、発表会中から目につく。私もあれをやりたかった。昨年までは、ほかの人が何を研修したかさえ分からなかった。さてどうしましょう。

臨床の先生がたはお優しいし、将来一緒に診療・研究に携わろうという意図も見受けられ、殆どの先生が自分のところで研修した学生を、一生懸命やりましたとか、優秀でした、研究を任せて下さった中で、お一人「三年生の時、何を勉強してきたのか？四年生でこんなものか。」と本音をおっしゃられた。こちらが本質にかなり近い。殆どの学生が自分のやったところを十分にか理解できない（それも十分にしか）。全ての発表に質問をしたが、内容に関する質問に自分で答えられたのは半分無かつたでしょう。この学年の特徴とは言わな

医学部医学科説明会

そろそろ変え時

入試専門委員長 元村 成

日時／二〇〇二年八月八日(木)一三時〇〇分～一七時三〇分
場所／臨床大講義室、手術部、薬剤部、脳血管病態部門研究室

本年も医学部説明会が開催された。今年は八十九名十引率者という多数が、あるいは学校単位に貸し切りバスで、あるいは個人が如何にも旅行がてらに、そして青森県内の一高校からは一年生二十四名という大勢が集まってきた。一年生か

らモチベーションを高めるという高校側の強い意図を感じた。今年は、例年配付される「弘前大学案内」(これも本年は医学部のページを学部案内として全面的に書き換えた)に加えて、最新の「医学部ウオーカー」第二十一号を配付したが見

東医体速報 今年も団体戦、個人戦に大活躍!

今年の東医体でも弘前大学は前年に引き続き優秀な成績を挙げた。

七月下旬に始まった第四十五回東医体夏期大会では各地で熱戦が展開され、ラグビー部が四年連続六度目の栄冠に輝いた。準硬式野球部も危なげなく勝ち進み三連覇を果たした。空手道競技では男子団体組手なら

ラグビー部	四年連続優勝
準硬式野球部	三年連続優勝
空手道部	二年連続優勝
柔道部	団体三位、個人優勝、三位
卓球部	団体三位、個人優勝
バドミントン部	団体三位
水泳部	個人優勝、三位

びに形においても優勝を果たし、文句なしの完全総合優勝の栄冠を勝ち得た(昨年も総合優勝)。さらに、

柔道部、卓球部男子、バドミントン部男子が団体で三位。団体戦のみならず個人戦でも弘前大の活躍は続き、柔道の個人重量級で佐々木英嗣(医学科一年)が優勝、軽重量級で井上亮(医学科四年)が三位、卓球男子ダブルスで竹田哲司・鈴木一

広(ともに医学科五年)が優勝、水泳では北澤あかり(医学科一年)が四〇〇メートル自由形で優勝、二〇〇メートル個人メドレーでも三位の成績をおさめた。

学生諸君の日頃の努力と健闘を讃えるところに、今後一層の精進を期待したい。なお、今年度の東医体夏期大会の成績の詳細ならびに熱戦の様子は次号に掲載の予定である。(若林 記)

加して頂いた)。加えて、鈴木重晴学務主任には急用の学部長代理でじっくり御挨拶と医学部の説明をして頂き、本年も手術部でのビデオ見学では大きなインパクトを与えて頂いた。薬剤部の菅原和信教授には薬局業務について、脳血管病態部門の佐藤敬教授にはレーザー顕微鏡の見学を担当して頂いた。多人数で大変でしたこと改めて感謝申し上げます。それにしても、このスタイルになって早六年で、すか、スケジュール・時間配分も含めて、そろそろ変え時でしょう。

基礎ソフトボール大会

細菌・法医学合同 12年ぶりの優勝を果たす

攻守にバランスのとれた細菌・法医学合同チームが六階連合の四連覇を阻止し、十二年ぶり六回目の優勝を遂げた。

五月二十三日に開幕した第二十三回学部長杯争奪基礎教職員・学生ソフトボール大会は混戦となった。優勝候補の本命、六階連合は

北日本懇親野球

教授団チーム奮戦記

教授団は元村成、早狩誠両投手の粘投と守備陣の鉄壁の守りで函館渡辺病院に八対五の勝利を収め、三年ぶりの初戦突破を果たし、ベスト十六に進出した。ベスト八を賭けた前年度優勝

七戸病院との対戦は終盤猛反撃をかけ、後一步のところまで追いつめたが、一、二回の失点が響き八対三で敗れ、悲願の準々決勝進出はまたも次年度以降に持ち越された。

危なげのない勝ち方で勝利を重ねたが、細菌・法医学合同に七対八でサヨナラ負けを喫した。この結果、両チームは四勝一敗で並んだが、規定により直接対決を制した細菌・法医学合同が優勝、六階連合は惜しくも準優勝に終わった。脳研は堅い守備で昨年からの順位を一つ上げたものの、上位の壁が破れず、三勝二敗で三位。二階連合は細菌・法医学合同、脳研に接戦のすえ破れ二勝三敗で四位。四階連合は細菌・法医学合同を破ったが二勝三敗で五位(第四位、第五位は直接対決による)。基礎事務連合は善戦むなし

く五戦全敗で最下位に終わった。熱戦が繰り広げられた大会であったが今年も天候にも恵まれ七月四日に全日程を消化し幕を閉じた。七月五日の表彰式では大会長の菅原医学部長から各チームに表彰状と記念品が手渡され健闘が称えられた。なお、本年度の最優秀選手賞には六階連合の四連覇を阻止するサヨナラヒットを放った若林敏輝大学院生(細菌学講座)が、また優秀選手賞には防衛率トップの脳研にあって主戦を務めた崔学范大学院生(脳血管病態部門)が輝いた。来年も熱戦が期待される。(若林 記)



狙いはホームラン、キャッチャー中根教授



応援に熱が入る(?)ベンチ

上がらぬまま、初回、二回と点を奪われたが、梅田孝遊撃手や相澤寛一塁手の気迫に満ちたプレーで再び闘志に火が点き回を重ねる毎に相手を追いつめていった。勝負の結末は最終回の相手エースと中軸打線との真剣勝負に持ち込まれ、手に汗握る場面となったが、善戦もここまでで惜しくも敗れた。

前述の選手に加えて事務部から三名(菊池孝雄左翼手、須田誠一捕手、熊谷文孝中堅手)、検査部から一名(高坂公博三塁手)、医学科教授会メンバーからは菅原和夫総監督をはじめとして棟方博文、八木橋操六、羽田隆吉、藤哲、立石智則の各教授の参加があり、それぞれ存分の活躍をした。三年前の勝利の立役者八木橋投手は昨年に続き肩の張りを訴えてスコアラを務めたが、来年は中二年の登板となるはずであり、エースの復活とともに教授団も捲土重来を期したい。益本後治事務部長をはじめとする応援団に感謝の意を評し、改めて参加選手の健闘を称えたい。



ジャマイカとトリニダード・トバゴの旅

脳研・脳血管病態部門教授 佐藤 敬

ジャマイカ南部地域保健強化プロジェクトの縁で、平成十四年十月にカリブ十三カ国から弘前大学へ地域の保健の研修員を受け入れることになり、その事前調査のため、六月三十日から七月八日までジャマイカ、トリニダード・トバゴ両国を訪れた。カリブ海への旅行と言えは豪華客船での旅を連想されるかもしれないが、そんなイメージとは程遠い駆け足の旅行であった。

今回の研修コースは「生活習慣病」がテーマだが、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ両国の担当者は皆その重要性を認識しつつも、やはりAIDSは予防に頼るべき疾患でなく一予防は重要だが一根本的治療法の開発に真剣に取り組むべき疾患に違いないと個人的には思うに至った。

最後に、トリニダード・トバゴはTrinidad and Tobagoと綴ることを初めて知り、そして国名の中に英語とスペイン語が混ざっていることに気がついた。コロナブスは辿り着いた西インド諸島の一つにキリスト教独特の教義に基づく「三位一体」のスペイン名Trinidadを与えた。その後もう一つの島Tobagoを合わせてイギリス領となり、現在の国名になったという。

今回知ったことの一つは、カリブ海諸国では様々な国際的保健プロジェクトが進行している、世界各国からの専門家が働いているということである。例えば今回訪問したWHO傘下の組織Pan American Health Organization (PAHO)の事務所で会談した女医さんはパナマ人、同じくWHOの組織Caribbean Epidemiology Center (CAREC)に勤務する女医さんはアイルランド人という具合である。

その二つ目。どこに行ってもHIV/AIDSの話になる。今回の研修コースは「生活習慣病」がテーマだが、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ両国の担当者は皆その重要性を認識しつつも、やはりAIDSは予防に頼るべき疾患でなく一予防は重要だが一根本的治療法の開発に真剣に取り組むべき疾患に違いないと個人的には思うに至った。



Port of Spain (トリニダード) のHilton Hotelで Caribbean Epidemiology CenterのMcdougal医師と。

人事異動

●医学部医学科

昇任(14・7・1)

整形外科学 講師

西川 真史 (医学部助手)

昇任(14・8・1)

生化学第一 教授

高垣 啓一 (医学部助教授)

分子病態部門 講師

森 文秋 (医学部助手)

辞職(14・8・31)

生理学第二 助手

梅原 豊 (采国カトリック大学ロサンゼルス校)

採用(14・9・1)

解剖学第一 助手

浅野 義哉 (群馬大学医学部実験研究補助員)

●附属病院

辞職(14・6・30)

眼科 助手

齋藤 桂子 (八戸市立市民病院)

昇任(14・7・1)

放射線科 講師

齋藤 陽子 (保健学科教授)

採用(14・7・1)

眼科 助手

間宮 和久 (医員)

放射線科 助手

近藤 英宏 (医員)

につながる言葉は聞くことができたのは、このプロジェクトに多少なりとも関わる者として嬉しいことである。

ワールドカップ観戦記

トルシエは中田に嫉妬した

医学部サッカー部顧問 元村 成

「長陵サッカー部の誇るサッカー狂が集まり、ワールドカップを観戦し、あるいは、ワールドカップ運営を手伝い、その後にお酒が飲める。これ以上の幸せはありません。少人数ではなく、多くの先生が集まることに意義があります。」この文章そのままに二〇〇二年六月十二日に宮城サッカースタジアムで本物のワールドカップ「アルゼンチン対スウェーデン」戦を長陵サッカー部OBが十数名で観戦したのである。あえて名前を挙げません。試合の結果は御存知の通り、アルゼンチンが予選リーグ敗退になってしまった。何が凄いかは、次の日本―トルコ戦と



比較ればわかる。まずメンタリティー(自分がどういう立場にあるのかを、如何に国を代表しているのかを解っているのかの違い)、それがどうプレーにでてくるのかの違い)、身体能力と言った時の日本の関係者のアホな見解から遠く離れた本場のフィジカルの強さとそれを可能にする頭のの高さ、それら全てが六月十二日の宮城スタジアムの中にあつた。ありがたう。

心にユース時代から一緒に世界と戦ってきた中田のチームなのです。トルシエと中田の仲が色々言われたって中田無しには成り立たないのです。他のメンバーが自分を持っていないこともあるが、それを解っていたからこそ最後の最後で中田に焼きもちを灼いたとしか言い様が無い。十八日のスタンドから何度「西沢替える」のコールを送ったことか。後半の中ごろに中田と西沢がピッチサイドに二人で水を飲みに来ていた。「中田はきつと西沢にちゃんとやれと言っているんだ」と声を張り上げていた。そして負けた。さつさとスタジアムを後にした。帰りのバスの中で韓国がホームタウンデシジョンを最大限利用して勝ち上がった姿をみて、日本の、日本人の限界が見えた気がした。大学も同じだ。

試合後にやつと仙台駅に皆が集まり、長陵サッカー部OBの誇るサッカー狂が一同に会し、酒を酌み交わし、皆四十年、三十年、二十年前に東医体をめざして必死だった面影をそのままに熱くなっていた。翌日は日本対チュニジア戦である。この時は六月十八日(火)のRound 16のチケットを持っていた。朝日新聞の抽選で当たったのだ。皆に日本がグループHを一位で通過することを祈られて(半分揶揄されて)別れたのであった。

果たして、六月十八日に運命の決勝トーナメント一回戦日本対トルコ戦が廻ってきたのだ。何と言う天の采配か。医学部の教授が二試合も見に行っていないのなんて愚問は私には通用しない。日頃の行いの良さを皆が認めるしかないのだ。弘前から宮城スタジアムへの専用バスで四時間半ひたすらバスの旅である。仙台が近くなってきたら豪雨である。到着したスタジアムは水浸しである。駐車場からスタジアムまで足首まで水たまりに浸かり、足を取

られ乍ら雨ガッパを頭から被り、折り畳み傘をさして(普通の傘は凶器だそうだが)やつとスタジアムに到着である。中はスタジアムの席は土砂降りなので雨宿りのサポーターで身動きが取れない。いやな予感がした。日本代表は雨に弱い。加えて、大事な試合に私が応援に行くといけない。何とかジレンクスを破ってくれと期待したが、先発メンバーが発表になってがっかりした。「トルシエは中田に嫉妬した。」これが私の見解です。宮城スタジアムでの日本の応援が後でいろいろ言われたが、全て見当はずれも甚だしい。そもそも「トルシエありがとう」も「日本代表ありがとう」なんて口が裂けても言えない。ワールドカップに入る迄、トルシエは日本サッカー協会のバカ共に抗して、きちんと自己主張をしてきた。だから今回の日本代表がある。但し、このチームは中田のチームなのだ。中田を中

六月三十日(テレビ観戦だったが)、ワールドカップ決勝戦に我がドイツが下馬評をひっくり返して進出した。負けて準備勝だったが、ゴールキーパー出身として、守護神カーンに憧れることと思います。その意味で編集業務の一端に加えていただいたことを誇りに思っています。より親しみ易い医学部ウオーカーを目指して今回は写真を豊富にした。この編集委員の方針でしたが、記事が豊富で紙面の都合上割愛されたものも少なくありません。また、記事も甲乙つけがたい内容でいづれを採用すべきか迷う場面もありました。ともかく学部長談、新任教授、研究室紹介、研究費、海外活動など幅広い記事が集められました。夏のお忙しいなか、ご寄稿いただきまして先生方に感謝申し上げます。また、編集委員会の皆様ご苦労様でした。(花田 記)



と同時に、決勝戦のファンブルをきちんと頭にたたきこんでおかなければならぬ。それが全てなのだ。試合後ずっとゴールポストにもたれかかって立ち上がろうとしないカーンを忘れてはいけません。レベルの違いはあれ、自分のものになければ発展はない。

編集後記

木村編集委員長の緻密な計画表をもとに順調に記事は集められ、今回号も無事発行の運びとなりました。国立弘前病院勤務時代、机に置かれていた「医学部ウオーカー」は色彩が乏しいにもかかわらず数ある機関紙のなかでもひとときわきを引く存在で一気に読み通したものです。それは馴染み深い先生方の名前を見出ししたり、母校の華々しい活躍を知る楽しみがあったからです。遠く離れている卒業生あるいは関係者の方々にしてみればなおさらのことと思えます。その意味で編集業務の一端に加えていただいたことを誇りに思っています。より親しみ易い医学部ウオーカーを目指して今回は写真を豊富にした。この編集委員の方針でしたが、記事が豊富で紙面の都合上割愛されたものも少なくありません。また、記事も甲乙つけがたい内容でいづれを採用すべきか迷う場面もありました。ともかく学部長談、新任教授、研究室紹介、研究費、海外活動など幅広い記事が集められました。夏のお忙しいなか、ご寄稿いただきまして先生方に感謝申し上げます。また、編集委員会の皆様ご苦労様でした。(花田 記)